



トラックや 林道がない時代の 山仕事、製材仕事

木を植えて、育て、山を守り
自然に生かされ、我々は生きる根を張る

小川耕太郎の父、小川欽弥回想録。

皆様方には、子ども達の商品を御ひいきにして頂き、誠に有難うございます。私は昭和八年生まれ、七十歳を過ぎました。時の流れの中で、今の私にとって精神安定の元になっておりますのは、一生懸命働くことと三人の子を育てた喜びです。今日は嫁さんから「車やフォークリフトが無かった時代、どのようにして植林や製材仕事をしていたか書いてみない!」と勧められ、昔の思い出を書かせて頂きました。お忙しいかと存じますがお付き合いの程宜しくお願いします。

小川欽弥



第一章

林道がない時代の植林仕事。



最近は「たらこが海に泳いでいる」と思っている親子がいると聞きますが、家も木で出来ていることがわかりにくくなっているようです。家は木で造られ、木の故郷は山であり、山の生態が私たちの健康にも作用するということを少しでも皆様にご理解いただけたら、しあわせに思います。

トラックやフォークリフトがない肉体労働

「丁稚奉公時代」

私たちは製材仕事をするもの者にとり、家を建てることは木を育て、伐り、製材し、また木を植える山を循環させることでした。よって家を建てるには、それ以前に木を少なくとも五十年以上かけて育てなくてはならず、すべての作業が山を守ることにつながっていました。

当時は、木は市場で購入するものではなく、山に生えている木を購入していました。そのため、山へ行つて木の育った環境をみながら、人相ならぬ林相を読み、木を伐採し、はじめて製材仕事ができるました。

今は昭和二十年代の頃と比べ、私達には想像がつかなかったほど社会全体が豊かな時代になりました。しかし少し気になることがあります。それは「生命のしくみ」を実感できにくい世の中になってきていることです。

お願いしたら生意気だといわれ許してもらえませんでした。

当時の私は、そのようなことで材木屋を辞めてしまつて故郷に帰り、地元の材木屋に勤め検尺人（検尺と尺人（検尺といつて石数へ体積を確認したり、等級（質）を整える仕事）につきました。親方から「長い木をいかにして価値のある寸法に製材するか」他、多くの技術を学び下積み時代を過ごしました。

お金は後でよい。

「独立時代」

下積み時代にかわいがつて頂いた山主さんから、当時の価格（昭和三十六年）で百万円位の山林を「君なら売る。お金は後でよい」との信じられないようなよいお話を頂き独立出来ました。人間真面目に働いていたら誰かがみてくれるのだと思ひました。



苗二十kgを背負い山へ

「植林仕事」

林道が無い時代でしたので近くの山だけを植林にいきます。（雑木山は山深いところにありますので、林道ができた時代から雑木を伐採して針葉樹を植林しました。）山の高さでいうと四百mくらいの所まで植林をします。東紀州の山は傾斜が激しく、四十度くらいの坂道を四百m登ることを想像して頂くとわかり易いと思います。「二月梅雨入り（旧暦：現在の三月）」といつて雨の多い三月に苗を植えます。苗を植えた後、四月に「穀雨」といい恵みの雨が降ります。この頃の雨は田畑をうるおし、穀物の成長を助けます。木も同様に、この時期に根を張るため多くの水分を必要とします。

植林の基本は一人一回で最低苗二百本（十kgの米二袋：二十kg）を女性の場合は背負い、男性は天秤棒でかつぎ片道一〜六km（片道で二時間半程度）山へもつていきます。

一畝（百×百m）で約八千本（当時の尾鷲ヒノキの場合）植えます。植林は根が乾燥すると活着（根が土につく状態）が悪いので朝早くから作業を始めます。朝六時頃に苗をかついで登頂、七時半頃に現場へ到着し、鍬で土を掘り植林しました。なにもかも手作業で、たった一畝の植林に約一ヶ月もかかりました。



五十年かけ育てる山の手入れ

植林後三年までは、年に二回下草刈りを行いその時に「除伐」を行います。除伐とは、曲がりのある木、育ちの悪い木などを捨て伐ることです。約十年間で八千本の苗のうち、残るのは四千本になります。除伐された木は「農業用」に使います。

昔は米を天日乾燥するときの棒として使われていました。二十年後、三十年後は「間伐」します。一部の木を伐採することで残った木の生長を促し、森林の健康を守ることを間伐と呼び、伐採された材木を間伐材といえます。間伐をしないと、木の根付きが悪く、大雨による土砂災害や、倒れた木が流出して河川沿いの人家に大きな被害をもたらすこともあります。間伐材は、むかし建設現

場の足場丸太として利用されていました。現在様々な間伐利用が、提案されていますが、先ほどから申し上げています通り、木を植えて育て、伐採する九割が間伐材になる計算になります。木を山から出す費用がないと赤字になってしまいますので、なかなか手入れができないのが現状なのです。

第二章

山に生えている木を購入後、製材



木は時間の缶詰

住宅の柱として育つまでに最低五十年の歳月が必要です。八千本の苗から約十％（八百本）程度が商品になります。このように長い時間と労力をかけて育成しますので「木は時間の缶詰」と呼ばれるのではないのでしょうか。最近では原木市場で丸太を購入し製材される製材所が多くなりましたが私の時代は立木（山に生えている木）を購入していました。この立木は購入する前に、山の価値を調べる必要があります。

人相ならぬ林相を読む

人相があるように山にも林相があります。同じ時期に植林した木でも、北斜面か南斜面かで木の質が違ってくる。成長が早く太いものもあれば細い木もあります。まず、山に谷

があるか確認します。なぜなら谷で生息した木々は水と養分が充分に与えられ太い木が取れるからです。ちなみに尾鷲ヒノキは成長が遅く木目がよく詰まっていることから、柱材の優良産地として有名です。

立木調査では木の太さを測る「尺廻し」を行います。尾鷲地区では巻き尺を使って目の高さで木の円周を測ります。巻き尺を使うことから「尺廻し」と呼ばれていました。その寸法と目視による木の長さから全体の材積を割り出すのです。尾鷲以外では胸高直径といい、胸の高さのラインで木の直径を測り、そこから材積を計算し割り出す方法が主流です。

計測のポイントとは、傾斜地で計測の場合は木の山側に立ち測ります。皆さんは木の断面は正円に近い形を想像されますでしょうか？

ときに伐採した木と立ち木がこすれてキズがつきます」など一本一本、木の状態を観察します。

山で生えている木を 部位に分けて品定め 木の表情から内部を 読み取り落れ

傾斜地に生えている木は谷の方向に太い楕円に育ちます。また材積を出す場合には、木の皮の厚さを考慮しなくてはなりません。最近、六十年位で木を伐採しますが当時は十、五c m 角の柱が主流でしたので約三十五〜四十年生の木を伐採しました。尺廻しをしながら、木の太さだけでなく、まっすぐ育っているか、木の皮を見て枝打ちはされているか、キズ木はあるかどうか（キズ木とは①鹿、熊、ウサギなどの動物は苗木の皮を剥いて食べますので木にキズがついています②また間伐した

が高値で売れましたので四面ある柱の何面くらい無節が採れるか、木の表情から内部を読み取ることが重要なのです。木の高さは平均十五〜十六mあります。

山の価値を 帳面に書き出す調査

立木調査は朝早くから始まります。調査時間は約一日。現場までは、

「道無き道」を何キロも歩きます。「道無き道」で一番思い出があるのは、九鬼町の山です。私の妻が盲腸の手術を終えた一週間後に尾鷲市九鬼町の山を売る話を聞き、山調べに行きました。

いつも帳面は妻がつけていたので妻と一緒に登頂した。山はマツタテ（まるで九十度位の角度があるかのような傾斜の激しいことをマツタテと呼びます）に感じるくらい道無き道の山でしたので当時、尺廻しをしていた方が「こりや奥さん大変、たわ病み上がりでこんな山に登ったら！山から落ちて行かない方がいいがな」と言われ、心配しながら山登りをしました。

3 番玉

当時は本瓦を乗せる垂木は約60mでしたので3番玉が使われることが多かったです。今では、いろいろな材質の屋根がありますのでスレートかわらは約5.5cmトタン屋根など4.5cm位の垂木を使っています。また3番玉は足場丸太やバタ核（当時、家を建てる時工場に使うコンクリートの型枠をおさえる材）としても使われていました。3番玉は60〜90cm角が取れます。3番玉が太い場合は柱に使えます。

2 番玉

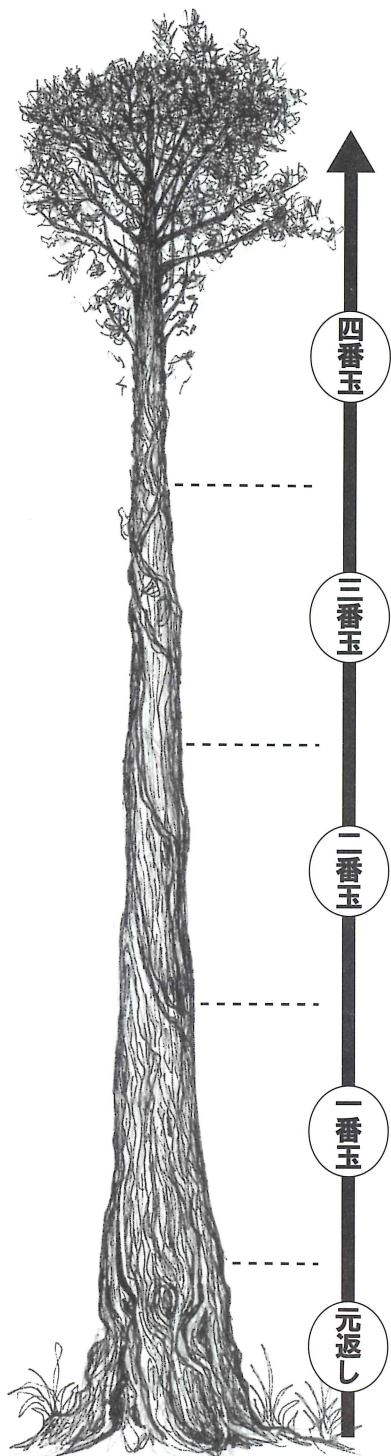
当時は、12〜15cm角の柱、造作材（鴨

1 番玉

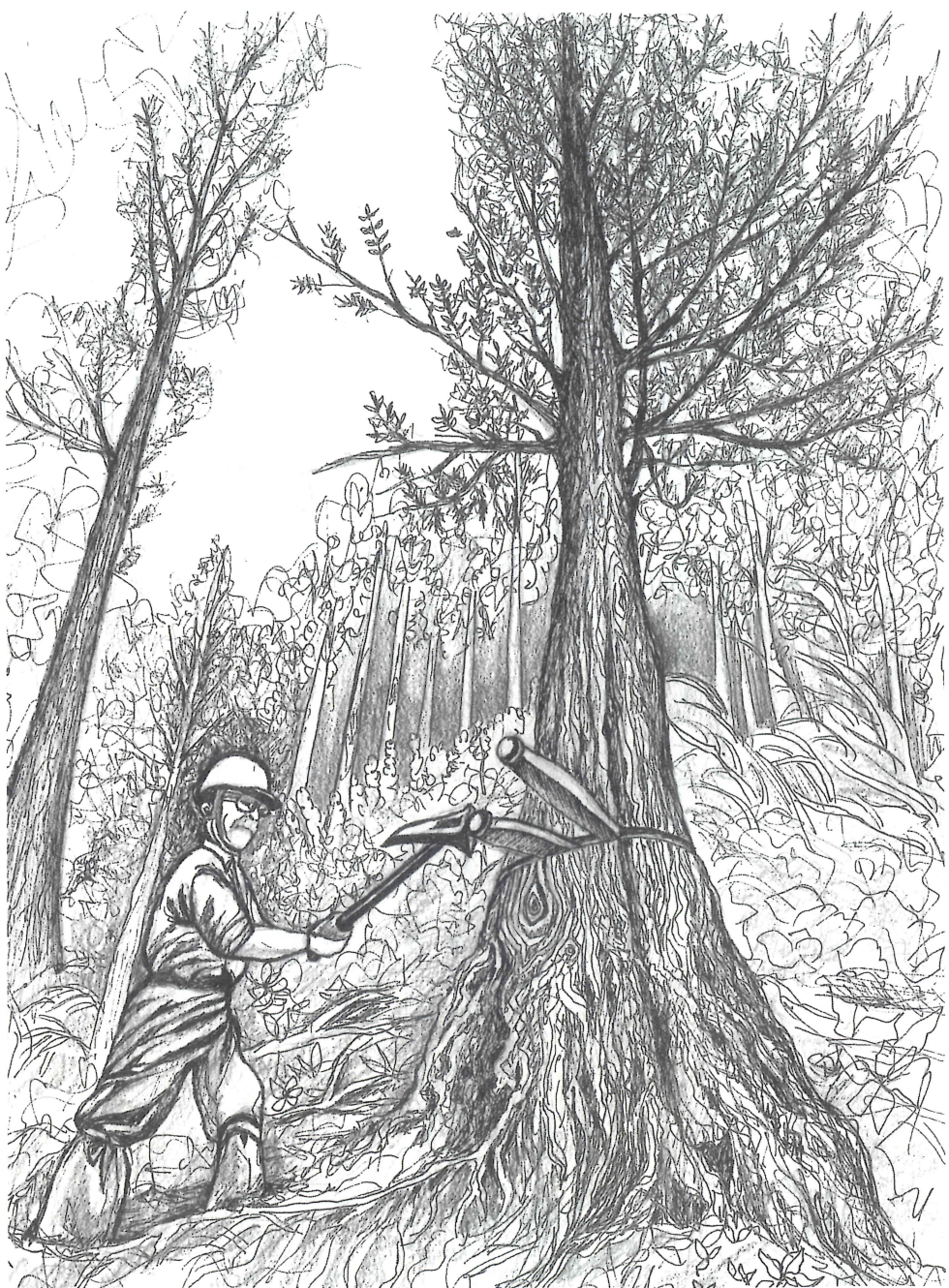
木によって成長が異なりますので1本1本違いますが、平均すると1番玉から1.5〜12cm角の柱をとります。1番玉でまっすぐある程度の太さで6mとれる場合は通し柱（住宅の1階〜2階まで通る柱）として使います。

元返し

木の根元に曲がりがある時は、根本の曲がった部分を伐ります。木の一番根の部分を「元返し」と呼びます。苗木の時に動物による被害があった場所などはその部分はずしますので元返しを長くとります。元返しは魚箱、みかん箱、まな板、すし屋で使われる盛り付け皿などに使います。根元がまっすぐの場合は根元から3〜6mの木を一番玉と呼びます。



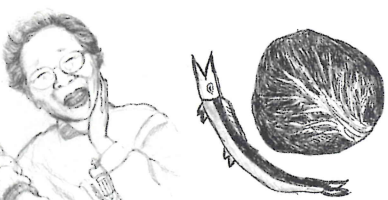
尺廻しの装備は軽量です。持ち物は巻き尺、鉛筆、帳面、お昼のお弁当くらいです。作業は帳面係一人に對し尺廻し係が一〜五人のチームで行います。尺廻し係が大声で木の円周を叫びます。二尺三寸なら「二十三」、尺八寸なら「十八」というように数で表します。帳面係の妻は前もってノートに一行ずつ十五〜三十五の数字を書いておき、その横に正の字を書きながら立木の本数を記録します。帳面係は妻一人でしたので尺廻しが五人もいると山の中をかけずりながら帳面をつけていました。



（ビーフジャーキー位の形状まで干した干物）でした。日が暮れる前に山を下ります。

入札金額が決まるまで

帰ってきて、すぐに私が山で調査した内容を元に計算をしました。尺廻しと目視の内容を元にその木全体でいくらくに売れるか計算します。そこから、切り出しの経費、油代や運賃、製材費等を差し引いて入札金額をはじき出します。見る人によって五割くらい金額が違うこともありましたが、三千万円位の大きな山で二



お昼は十時半頃になります。お弁当はおむすびが多かったです。モタモタしているときに日が暮れてしましますので昼食にはからし菜を漬けた（高菜漬けのようなもの）葉っぱを白いおにぎりに巻いたおむすびを食べます。（こうすると漬け物とご飯が一緒に食べられますので食事時間が早く終わります）おかずは、カンピンタン状態の秋刀魚の干物

番札と五百万円以上離れていることもありましたが、何度も何度も確認し後は自分の眼を信じ入札金額を決定します。

山調べの日は、朝早くから夜中までかかります。と言いますのは、立木を購入するのに最低でも一千万円ほどのお金が必要になります。私は、何も無いところから商いを始めましたので、そのような現金を持っていませんでした。翌朝には銀行に行き、お金を借りる約束を取り付けなくては山を購入できませんので必死だったのです。翌朝すぐに銀行に貸し付けのお願いに行きました。銀行の貸し付け担当者の方に、山の計算を説明させて頂くのですが、何遍話しても山の計算が理解出来ない方でしたので、説明するのに苦労しました。お金を借りる手続きが終わり、やっと山を購入する準備が整います。山の入札では、一般入札と指名入札があります。指名入札では山主が特定のお客様のみ案内状を出します。一般入札では山主が製材所や材木業者などの業界に案内状を出され誰でも参加できる入札です。入札の日迄（十五日〜三十日間前までが調査期間）にそれぞれの立場で立木調査をし、林相を判断し、入札価格を決め必要な資金の手当てをしておきます。入札する業者は、価格を入札書に書いて入札箱に入れます。



入札から契約まで

その場で山主が、入札箱を開いて一番高い値を付けた業者に落札します。落札業者は一週間くらいの内に山主と契約します。地域によって異なりますが、尾鷲地域では一般的に契約する時に落札価格の二割～三割を現金で支払い、残金は三ヶ月、六ヶ月目に分けて約束手形を発行するのが一般的です。（山林家の都合で変更になること有り）

契約を終え、伐採する

契約がすみましたら伐採を行います。山一畝（三千坪）で千石（原木円周七十二cm×千本、約二百八十切り出すのに五く六人くらいで五十日間程度かかります。伐採搬出は、

山で働く人達と契約して切り出してもらいます。

チェーンソーで木を伐採し、原木を山から搬出してくるのにワイヤーロープを張ります。まず、細いロープを担いで山に登り、ワイヤーを張りたい方向にそのロープを引っ張りながら、ひたすらまっすぐ山を下っていきます。そのロープにワイヤーをつないで引っ張り上げることで、山の上から下にワイヤーが張れるのです。

ですから、谷があらうと岩があらうとまっすぐに降りないと、途中で木や岩に引っかかって張れなくなるのです。ある時は大きな岩から滑るように、ある時にはトゲのある木と戦いながら降りなければなりません。日本の山林、特に尾鷲や熊野のようなりアス式海岸の地形をもつ山林は傾斜が激しいので何線もワイヤーロープを張ることがあります。一本で出せれば、理想ですが山は高いところがあり低いところもあり、また線を弾く途中に木や岩が邪魔になる場合もあります。

昭和三十年代当時は山仕事が大盛の時代でした。尾鷲市賀田町では、人口の約1割、百人位（十代～三十代中心）が山仕事をしていました。現在は四十五歳～六十五歳が中心で、賀田町では山仕事をされる人は約十人ですから大幅に減っていることが

おわかりになるかと思います。私が十三歳の頃は、父が番傘職人を生業としていました。戦後でモノが無い時代ですから原料は配給でした。

そのため山仕事を手伝ってアルバイト料を稼ぎ、生活の足しにしていました。私に限らずこの町の男児であれば、皆一度は若い時に山仕事にたずさわっていました。体力のいる仕事ですので、中学、高校生位の時期に経験していると身体の使い方も覚えられます。

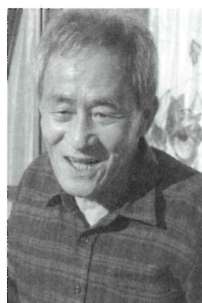
切り出しが終え、玉切り

切り出した原木は土場に運ばれ木の根を元返しとして、根の上の部分一番玉に、その上の部分を、二番玉、三番玉に、木の一番上の部分を四番玉にと玉伐りが行われます。次に製材です。十二cm角の柱を取りたい場合、一度十三、五cm角くらいに挽き一ヶ月間程度放置してから、もう一度十二、五cm角に挽きます。そうすることによって木の歪みがとれます。（今は乾燥機がありますので一週間程度乾燥庫に入れます）挽きなおした柱はモルダーというカンナをかける機械に通し、十二cmピツタリにして出荷します。

山SUNメールニュース

二〇〇三年二月二十二日号 二〇〇四年一月二十四日号、九月二十七日号掲載号より抜粋

嫁さんに山SUNニュースを書くように薦められ書かせて頂いておりますが、山の話の思い出しながら書いておりますと……山が荒れ、大雨などの災害が心配される時代になってきていると不安を感じております。私達の町の問題だけではないと思います。是非教えてください。



★★★小川社では月に一回程度、様々なニュースをメールでお伝えするEメールニュース、お送りしています。ご希望の方にはお送りします、ホームページよりメールニュース配信のお申し込みできます。是非、ご購読下さいませ★★★

<http://www.mitsurouwax.com>
ミツロウワックス